

聖書宣教会通信

〒205-0017 東京都羽村市羽西2-9-3 Tel 042(554)1710 Fax 042(554)5562 振替・00150-6-34971

巻頭言

これからの方向「レカブ人のように」

聖書宣教会会長 鞭木由行
生田丘の上キリスト教会牧師

レカブ人

預言者エレミヤの時代に、レカブ人という一風変わった一族が存在していたことが知られています（エレミヤ35章）。彼らは「純粋な遊牧民であれ」との先祖の命令に聞き従い、畑を持たず、家も建てず、天幕生活に甘んじ、ぶどう酒を拒みました。当時、彼らは時代の流れに取り残された気の毒な一族と同情されていたのかもしれませんが、主は、彼らこそイスラエル民族が見習うべき模範であることを示されました。このレカブ人の記録は、時代の波にもまれる教会を、そして神学校を大いに励ますみことばではないかと思えます。そして、私たちに改めて何をすべきかを指し示しています。

新カリキュラム

先にお伝えした通り聖書宣教会は、再建の一步としてカリキュラムの改訂作業を進めています。聖書宣教会が提供するカリキュラムの中にこそ、今後私たちが向かうべき方向性が最も具体的に現れるものと考えています。教師会が泊まりがけで改訂作業をするなかで、私たちが改めて確認してきたことは、本来の「聖書学」を中心としたカリキュラムに戻るということでした。それは可能な限り原語から聖書を正しく解釈し、みことばから直接聞くことを可能にする教育です。神学校がその時代の必要に応えることは当然のことですが、しかし、それゆえに、聖書そのものの学びまで後退させてしまうべきではないでしょう。この点、私たちはレカブ人のように、頑固でなければならぬと思っています。そして、聖書学中心の神学校はもはや必要ないということであれば、その時点で聖書宣教会は、その使命を果たし終えたというでしょう。

みことばに聞く

私は、かつて聖書宣教会創立者の一人である舟喜順一先生と、小作駅から聖書宣教会へ話しながら向かって行ったときのことを思い出しました。話の前後は忘れてしまいましたが、順一先生は「宗教改革者たちも、みことばに聞くということを途中で止めてしまった」と言ったのです。そのとき、私は改めて順一先生が徹底してみことばに聞くという信念に生きた人であることを思わされました。そして聖書神学舎は、ただみことばに聞くことを可能にする神学教育を継続することだと思に至りました。聖書を読む者が、すでに時代の子であり、その時代の枠組みを外すことはできませんが、それでもなお、可能な限り前提や時代的枠組みを越えて、みことばにそのまま向かい聞き続けること、これが聖書宣教会が最初から目指して来た教育でした。時代の要請に応えることで変質し、いつの間にかこの世に飲み込まれてしまった有名大学がアメリカにはいくつもあります。ハーバード大やイェール大のような有名大学と比較することは僭越ですが、しかし、問題の本質は同じことではないでしょうか。その時代の流れに乗った運動に走るのではなく、レカブ人のように頑固にみことばにとどまることを目指したいと思っています。その必要のために改めて「聖書釈義」を中心に据えた神学教育に取り組みたいと願っています。

預言者たちのメッセージは「聞け、そうすれば生きる」でした。それはまた聖書全体のメッセージです。私たちの向かうべき道はここにあると考えているのです。



4名の兄弟達を迎えて始まりました新年度も、連休が終わり、いよいよ本格的な歩みになりました。先日のオープンデイには昨年よりも15、6名多くの方々が来られました。神学校教育の現場に少しでも触れていただき、具体的に祈っていただくための、貴重な機会です。春だけでなく、秋にもあると良いですね、という感想も聞いています。教会によって祈られ、支えられる神学校として、教育の内実をより良く知っていたいただくための努力が必要であると実感しました。

来年3月の卒業、修了を目指して最後の学年の学びに励んでいる研修生たちは9名です。卒業論文・研究のテーマと担当の教師達が決まりましたので、いよいよ本格的なリサーチが始まります。一人一人が、与えられたテーマについて少しでも良き論文を主にお捧げできるようにと願っています。学問的な掘り下げだけでなく、自らの信仰が深められて行くように、お祈りください。

聖書宣教会での訓練は、教室での学びと、寮生活と、教会奉仕の三つがセットになっています。みことばの学びが、実生活の歩みの中で生

かさされ、人との関わりの中でためされ、鍛えられて行くようにと願っています。生活のあらゆる領域で主により頼み、主によって必要を満たしていただき、一步一步を導かれて行くことを、教師も研修生も学んで行きたいと願っています。神のみことばである聖書そのものよりも人間の体験が、そして聖書のメッセージよりも現代思想の枠組みが強調される時代にあって、「真に霊的なこと」が何であるかを聖書から見極めることが出来るようにお祈りください。

教師会は、今、聖書神学舎が目指してきた教育を更により良く行って行けるようにカリキュラムの改善をしています。「巻頭言」をご覧ください。また、宣教会の教会音楽教育における使命を確認しつつ、今後を検討しています。7月に予定されている夏期研修講座と教会音楽講習会への参加者が多く与えられるように願っています。

どうか、将来を担って行く教師陣が整えられるようにお祈りください。病い（筋萎縮性側索硬化症）の中にある遠藤嘉信先生のために、また、ご家族のために引き続きお祈りください。

教会音楽科教師 飯島千雍子

「彼らは、神のしもべモーセの歌と小羊の歌とを歌って言った。」（黙示録 15章 3a節）
「聖書の朗読と勧めと教えとに専念しなさい。」
（Iテモテ 4章 13b節）

主の聖名を賛美申し上げます。いつも教会音楽科のためにお祈りくださりありがとうございます。3月、荻野由紀子姉が卒業しました。卒業演習（作曲を選択）の作品、詩篇 73篇 21節～28節は本科・シニアコース研修生らの協力も得て、「教会音楽のひととき」で賛美され、歌った者も聴いた者もみことばを深く受け止めたことでした。2007年度は、残念ながら研修生が1名もいません。この様な時、主の前に静まり、教会音楽科の今後について、主の御心を教えていただくことを願っております。

歌い手を志し大学受験に邁進していた渦中で教会に導かれ、聖書を読み、キリストに出会い信仰を与えられた時から、私の歌の学びは目標

が大きく変わりました。念願の大学で声楽を学びつつ、賛美の歌を学べる場所と教師を祈り求めていたとき、岳藤豪希先生がドイツから帰国され、エヴァンゲリウム・カントライが誕生し、教会音楽奉仕者養成講座が開講されました。今日まで常に、主は学びの場所、機会、教師を備えてくださいました。

申命記や黙示録を通して、歌のこことばを唱えたこと、歌って言ったことについて考えています。Iテモテにある「聖書の朗読」についても、神のこことばを朗読することの意味を考えさせられます。今夏は「みことばと賛美」を主題に教会音楽夏期講習会が開催されます。ともに主の御業、福音を伝える賛美のこことば、主をたたえる賛美の歌を主に歌うことができますように。聖書宣教会の教会音楽科は他に2つとない学舎です。これからも教会音楽科のあゆみのためにお祈りくださいますよう、心からお願いたします。

2007 年度 新入会生



左より、森下、松田、滝野、李

氏 名	出 身 教 会	奉仕教会
(聖書神学舎本科) [4名]		
李 賢 娥	仁川恩恵教会 (基督教大韓監理会)	石神井福音教会
滝野 賀代	京都インターナショナル・チャペル (インターナショナル・チャペル・ミニストリス)	キリスト教朝顔教会
松田 聖一	太平チャペルキリスト教会 (福音バプテスト宣教団)	中野教会
森下 信義	下小鳥キリスト集会 (単立)	相原キリスト集会

新入会生の証し

みことばに留まる

森下 信義

「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」

(ヨハネ 8:31)

「絶対的な真理や基準なんてないのではないかと人々はつぶやき、多くの人は罪の奴隷であることに気づかぬまま、この世に安住しています。」

私は、この世にあって神の絶対的な基準を知るものとして、人々に自分の主張を語るのではなく、みことばそのものを伝えたいという思いが湧き上がってきました。聖書宣教会での学びを通して、全能の主をさらに覚え、まず私自身がみことばに留まる者とされるように歩んでいきたいと思えます。

主を賛美し、神の国を広げるために

李 賢娥

私は韓国で生まれ、小学生の頃から仁川にある教会に通いました。洗礼を受けたのは中学1年生の時ですが、自分の人生や使命について考えたのは高校に入ってからでした。祈りの中で主を賛美し、神の国を広げるために奉仕する(イザヤ 43:21、詩篇 71:14) 使命を頂きました。それから教会での奉仕を続けながら、賛美宣教団に参加しました。そして、2001年、その宣教団の活動で初めて日本に来ることができました。日本に対する伝道への重荷はその時から与えられました。

2004年には大阪での弟子訓練学校でもう一度自分の使命を確信し、卒業後、ある宣教団で働きましたが、みことばについての知識の足りなさや人間的な弱さを感じました。それで、みことばの学びのために祈った時に聖書宣教会のことを知り、入会まで導かれました。これからも主を賛美し、助けくださっている方々に感謝しながら、謙遜に学んでいきたいと思えます。

2006年度 卒業生・修了生



後列左より、伊藤、門谷、松野、高橋、山中
前列左より、大久保、荻野、鈴木、栗原、浅谷

氏 名

奉 仕 先

(聖書神学舎本科卒業) [7名]

かど 門 谷	のぶあき 信愛希	仙台福音自由教会	(日本福音自由教会協議会)
鈴木	いづみ いづみ	京都福音自由教会	(日本福音自由教会協議会)
高橋	義 広	グレースチャペル武豊	(同盟福音基督教会)
山中	直 義	湘南のぞみキリスト教会	(日本福音キリスト教会連合)
栗原	喜 義	横浜永谷キリスト教会	(日本福音キリスト教会連合)
松野	やす 牧 人	おおま 大間々キリスト教会	(福音伝道教団)
伊藤	太郎	岩槻福音自由教会	(日本福音自由教会協議会)

(聖書神学舎教会音楽科卒業) [1名]

荻野	由紀子	町田バプテスト教会	(単 立)
----	-----	-----------	-------

(聖書神学舎シニアコース修了) [2名]

あさ 浅 谷	やす 泰 生	えびの聖書教会	(バイブル・プロテスタント・基督教会)
大久保	直 邦	カルバリー・バプテスト豊田キリスト教会	(カルバリー・バプテスト)

卒業・修了生の証し

恵みの中で生まれた召し

伊藤 太郎

聖書宣教会での歩みは自らの召命の確認の時期でした。みことばを頂いて献身したわけですが、その真価を試されました。みことばに向かえず、祈れない時、学びと奉仕に限界を覚える時、自らの罪深さに向き合わされる時がありました。それらの日々を通して与えられたのは、神に対する渇きであり、神はその叫びに答えてくださるということを知った事であります。この事を知ったからこそ、私はこの先も生きてい

けると信じることができました。(最終学年の年に、神様はみことばと祈りの中で私の召しを確認してくださいました。)

また、多くの方のゆるしの中で生かされている事を知りました。研修生、教職員のお一人お一人、母教会、奉仕教会の先生と兄弟姉妹、きっと私がお会いしたことのない方の背後の祈り、また父と母のサポート、言うまでもないことですが、このことを忘れてはいけないと思いましたが、要するに、上も下も、右も左も、恵みのみでありました。

「主の限りないあわれみ」の証し

松野 牧人

4年間の日記を読み返してみると、「辛い、苦しい、妻を守れない自分が情けない」そんな言葉ばかりが並んでいます。多くの無理がありました。妻の手術。その直後の入会と別居生活。妻と家と6匹の猫を守る責任。大学卒業後13年間の肉体労働の結果の学力の低下。これらの諸要素を見れば、献身者としていかに問題が多い者であったかわかると思います。実際に、在

学中、多くの兄姉や先生からこれらの私の抱えている問題について指摘され、問われ続けました。その度に主に問い、祈りました。妻と何度も涙の相談をしました。しかし、そのどれも背負い続ける以外道が見出せませんでした。そしてついに卒業にたどり着きました。このことは奇跡だったとしか言えません。全能の主が、その大きなあわれみのゆえに、愚かで足りない弱い私たち夫婦と共に居てくださったので、この道をたどることができたのです。ただただ、感謝です。

日々主を新たに知る歩みへ

門谷 信愛希

数年前にキャンプで再会したある青年を思い出す。聖書を置き忘れて帰途に就いた彼に、さぞや困っているだろうと思って電話すると「聖書は全て頭の中にあるので大丈夫です」と言ったのである。しかし彼を笑うことはできない。かく言う私も、聖書宣教会で訓練を受けるまではこの青年のように「聖書の内容はもう分かっている」と心のどこかで思っている者であった。しかし4年間学んで教えられたのは「み

ことばには無限の広がりがある」ということであった。単語一つの中に宇宙がある。そこに創造者の息吹を感じる。みことばを学べば学ぶほど、主の偉大さを僅かも知らない塵のような自分に気付かされる。だから学びをやめることは、主に「もう分かりました」と言うようなものである。決してそうはなりたくない。今後の人生、あらゆる場面が主を知る学びの場となる。いつまでも主の素晴らしさを新たに味わい続ける者であること(詩34:8)。これが私の切なる願いである。

この宝を土の器の中に入れて

栗原 喜義

若い時に、神学校で学びたいという思いが与えられましたが、福音宣教への主の召しを確信させていただいたのは定年後でした。4年前に聖書宣教会に入会(シニアコース)させていただきましたが、学んでいく中で自分の召しにふさわしい学びは本科の学びであることを示されコース変更をお願いし許可されました。私にとって楽な学びは一つもありませんでした(特

に語学や釈義は難しかったです)が神様のお恵みと愛兄姉の祈りによって学びを続けさせていただきました。今、主によって教会に遣わされようとしています。主のみことばを取り次ぐことへの恐れを強く覚えています。「私たちは、この宝を、土の器の中に入れていくのです。」(IIコリント4:7)のみことばをいただいています。私は土の器に過ぎませんが御霊の助けを頂いて、主から託された尊い主の福音の宣教の使命を果たさせていただきたいと祈っています。

圧倒的恵み

鈴木 いづみ

何を証ししたらよいだろうか。神様は真実であるということ、主の忍耐とご愛には限りがないということ…。聞きなれた言葉かもしれない。でも、それが私の歩みに現実となった4年間だった。厳しい学びと目が回る寮生活、生き延びようと努めていたときは苦しかった。しかし、「もうダメです」と叫んだとき、主のあわれみが私を押し流し、主の御手の中に抱えられている感覚を覚えた。なぜ、私を召されたので

すかと問うことが何度もあった。主は理由を示さず、ただ「わたしについてきなさい」と語り続けてくださった。主について行きたい。私を呼び続けてくださるこの方に、これからはすがりついて生きていきたい。そして、この地になされる主のみわざを見つめ続けたい。

イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう。」(マタイ4:19)

近くで遠くで、祈り支えてくださったすべての方に、心から感謝します。

主にのみ信頼する

高橋義広

私は4年前、聖書宣教会に入会したものの、周りと比較し、「自分に自信が持てない」と劣等感を感じ、悩む毎日だった。しかし、ある時、主は、そんな私に『わたしがお前を選んだのだ』と励ましてくださった。それは、多摩川縁を祈りながら歩いている時だった。ふとその言葉が、心に浮かんできたのだ。確かに、私は主の召しを信じて神学校に入った。「王の王であり、全

知全能の神が召してくださったのだから、間違いはないはずだ」、「必要な能力も備わっているはずだ」という思いが心に湧いてきた。この時、「神の召し」ということが献身者の何よりの拠り所であるということをしかりと教えて頂いたのだと思う。主は聖書宣教会で私に必要な訓練を与えてくださり、ただ「主を土台」とし、「主のみを恐れ、信頼する」ことを徹底的に教えてくださった。4年間、決して立派な歩みではなかったが、この主に信頼してこれからも学び、奉仕させて頂きたい。

何を、いかに

山中直義

聖書宣教会における歩みを通して、私は、「何を、いかに教えられ」てきたのであろうか。

四年という月日を経た今、私は、主に次のように告白させて頂きたい。「私は、聖書宣教会という主の学舎において、『主の御言葉』によって、『主を知る』ことを教えられてきました。」

「主を知る」ためには、「主を知り続ける」ためには、「主の御言葉」に教えられる以外にはないということ、「御言葉に仕える」ことに自身をおささげくださった先生方によって教え

て頂いた。職員の方々には、そのような歩みを祈りと尊い御奉仕によって支えて頂いた。奉仕教会として集わせて頂いた教会の先生方、教会員の方々にも、多大なご折援とご支援を頂いた。共に歩ませて頂いた主にある仲間からも、愛する家族からも、多くの忍耐と励まし、愛を頂いた。心の底からの感謝を申し上げさせて頂きたい。

「御言葉に仕えるしもべ」として、主の教会に遣わされるにあたって、願い、祈る。「私のような卑しい者をさえ用いて、主ご自身が、御言葉をお語りくださいますように。」

栄光在主

聖書に基づく訓練を受けて

浅谷泰生

私は定年と同時に聖書宣教会に入会しました。早いもので入会してから3年間、シニアの人に励まされ、若い人に助けられてここまで来ることができました。健康を一番心配しましたが守られて感謝しています。これは教会の方々や研修生に祈っていただいたゆえであると思います。

私が聖書宣教会で特に得たものは、祈りの姿勢、神への信頼、真摯な学びや奉仕の態度等です。私は寮生活の経験がなく、最初は大変でし

たがすぐに慣れて、気さくな寮生と寝食を共にしてあまり年齢も気にしないで楽しく過ごすことができました。

学びは大変厳しかったのですが、造詣の深い先生方からみことばを学んで喜びと充実感がありました。原語から聖書を学んでみことばを深く味わう経験もできました。私は困難や大変さの無いところに充実感や達成感はないと思います。聖書に基づく訓練を受けることができて本当によかったと思います。この訓練は必ずこれからの奉仕に生かせると思います。

皆さまのご支援を心より感謝いたします。

第33回 聖書神学舎夏期研修講座

期間：7月11日(水)～13日(金)

テーマ：「みことばを語るために

～釈義から説教へ」

- 申込みは締め切られています。
研修の祝福をお祈りください。

第23回 教会音楽夏期講習会

期間：7月26日(木)～28日(土)

テーマ：「みことばと賛美」

- 申込みを受付中です。6月30日必着です。
お問い合わせ、お申し込みください。

肩の荷を降ろした学び

大久保 直 邦

私は、リベラルな考えや反福音的教えは「百害あって一利なし」と言う信仰生活を送って来たため、聖書宣教会に入会した時に、幅広いキリスト教の理解に欠けていることを痛切に感じました。ですから、最初は少し授業にも反発しましたが、逆に慣れてくれば、どの授業も新しい知識を私に提供してくれ、興味深いものになりました。特に組織神学のような基礎的な学びは、私の聖書に対する知識を深めてくれまし

た。その中で「人は神を完全には知ることが出来ない」という理解は、私の肩の荷を降ろしてくれるものでした。私は神について、解らないことが沢山あるという不安をいつも持っていました。しかし、人はどんなに神学を究め、哲学的に思考しても、有限な存在である人間が、無限の存在である神を完全に理解することは出来ないという限界を知ることが出来たことは大きな恵みでした。ただ、これを隠れ蓑にして、神を知ることを努力を怠ってはならないと自戒しています。

主が成し遂げてくださった

荻 野 由紀子

私が卒業を迎える、そのこと自体が証、と言いたいと思います。迷い、涙を流すその度に、主はみことばから語りかけてくださり、励ましてくださいました。

自分の高慢さ、貧しさに向き合わされ、絶望する中で、そんな私たちのために愛する御子を与えてくださった神の愛の大きさを知らされました。また自らの無力さを味わい、そこに働く

神の力の大きさを知らされました。道を踏み外しそうになりながらも、転げ落ちなかったのは、主のあわれみによる導きと確信しています。

賛美に仕える者とさせていただくために、私自身が本当の意味で神を賛美する者となることを教えられたように思います。3年間の学びで主から教えられ続けたことは、主が成し遂げてくださることを信じて、ただ主に信頼すること、でありました。この者がへりくだり、真実の主のみこころを求めて歩みを進めていくことが出来るようにお祈りいただきたいと思います。

聖書宣教会のために祈ってくださる皆さまに心から感謝しています。 近況と祈りの課題をお届けします。

- 2007年度の研修生在籍は、本科24名（うち1名休会中）とシニアコース3名です。少数ですが、この年度も、主に喜ばれる学びと訓練を続けることができますように。
- 教会音楽科に研修生の在籍のない年度になりました。今後のためにお祈りください。
- 教師会のカリキュラムの改訂作業のうえに、主の助けと導きがありますように。
- 規約と財政の検討・整備のうえにも、主の確かな助けがありますように。
- 教職員一人一人が、主の支えの中で、主に最善をささげて仕えることができますように。
遠藤嘉信先生は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）との非常に厳しい闘いの中であって、特別の助けが必要です。どうぞ引き続きお祈りください。
- キャラバン伝道実習は、今年は、青森シオンキリスト教会（浜田献師）、三浦聖書教会（田辺直人師）、岸和田東聖書教会（井之上薫師）で奉仕させていただき、お世話になります。
- 今夏は、聖書神学舎夏期研修講座と教会音楽夏期講習会とが3年ぶりに開催されようとしております。主が用いてくださいますように。
- 2006年度の財政の必要を満たしてくださった主に感謝し、新しい年度の必要にも主の最善がなされますように。
- 教会や地域の祈り会などから祈禱課題のご請求をいただくことがあり、感謝しています。ご希望がございましたら事務局までお知らせください。

「木の望み」

関西地区同窓会・門戸聖書教会 牧師 徳永 大

「木には望みがある。たとえ切られても、また芽を出し、その若枝は絶えることがない」(ヨブ14:7)

卒業生の誰しもが母校のことを懐かしく思い出す時があると思います。私の場合は特に〈花〉を見た瞬間がそうです。花を見る時、心が思いもよらず時空の隔たりを超えて、聖書宣教会のあの中庭に飛んでいってしまうことがあります。それは例えば街角で満開の辛夷(こぶし)に出くわした時。あるいは花屋の店先でデルフィニウムの鉢を見つけた時……。そんな瞬間に、中庭のベンチで心を主に向けつつただ庭の花を眺めていた、あの至福の時に心がふと帰っていく—そういう経験をするのが少なからずあります。そして改めて自分にとって、聖書宣教会がどれほど大切な魂の故郷であるかを思わされるのです。

そんな私ですが、未だに今だに気になっていることがあります。それは図書室から中庭へ出た所くらいにある藤の木のことです。本来ならば、支柱を立て、棚を作りさえすれば立派な藤棚になる

ことができるであろう藤です。しかし、私が園芸係をしていた当時(今もでしょうか)は予算がなく、毎年、伸びては切れ伸びては切れ、結局人の背丈を越えることのできないまま放置されていました。(今は、どうなっているのでしょうか?)

聖書宣教会からの悲しむべき知らせを聞き、胸を痛め、祈られました。けれども、結局のところ、宣教会が信頼を回復してゆく唯一の道は、主の御前に謙り、悔い改めるということに尽きるでしょう。それとともに、この学び舎で学んだ者たちが「良い働き」をすること—みことばに忠実に仕え、主の教会に愛とまごころをもって仕えていくことしかないのだらうと思っています。

私たち卒業した者が、宣教会を陰から支える支柱となり、しっかりとした棚となることができまうように。また、聖書宣教会が新たにされて、見事な花と実を結べますように。遠くからそう祈りつつ、今、私に与えられている小さな奉仕に忠実でありたいと願っています。

〈リチャード・ボウカム博士による特別講演のお知らせ〉

テーマ 「イエスとその目撃者たち」

日時 7月3日(火) 講演 I 10:00~12:00 講演 II 13:00~15:00

対象 研修生、卒業生、その他

ボウカム先生は、英国セント・アンドリューズ大学の新約学教授です(遠藤勝信師、岡山英雄師が師事)。世界的に著名な新約学者のお一人で、これまでの著作は34冊を超えます。既に、ユダとペテロの手紙の注解書(WBC)の著者として知られていますが、現在、ヨハネの福音書(NIGTC)とルカの福音書(ICC)の注解書を執筆中。加えて、モルトマン研究の第一人者でもあり、モルトマン自身から、「私以上に私を知る男」と称されたほどです。

この度、国際聖書フォーラム(日本聖書協会主催)での講演のために来日されるボウカム先生が聖書宣教会をも訪れ、上記のテーマで講義をしてください。最近ご出版の、JESUS AND EYEWITNESSES(Eerdmans)の中で、先生は、綿密な歴史研究に基づき、様式史、編集史的アプローチの問題点と限界を明らかにしています。この新たな福音書研究の視点は、今後、新約学会のなかに大きな影響を及ぼして行くことになるでしょう。先生の講義に期待したいと思います。

費用 入場無料(自由献金)

申込み 6月末日までに、お名前と電話番号を、電話かFAXでお知らせください。

TEL 042-554-1710 FAX 042-554-5562

ご注意 ・当日の昼食は、恐れ入りますが、各自ご持参ください。

・外来者のためには駐車場がありませんので、ご了解ください。

・最寄り駅は、JR青梅線小作(おざく)駅です。

編集後記

困難の中にも、生ける主の御手を目の当たりにする思いです。具体的に祈ってくださる方々がいてくださることに感謝を深くしています。また2006年度決算においても、確かな主の支えを目の

当たりにして、主へのおそれと感謝を新たにしています。

主への熱心をもって祈り、支えてくださる、主にある同労の諸教会、諸兄弟姉の上に、天来の祝福をお祈りいたします。(A)